

私は小学生のころから近眼で、教室の席順は、いつも黒板に近い前から二列目だった。隣の席に男の子が座ったのは、小学校3年の時である。その子は、私よりずっと体が小さくて、弟のように思えた。

小さな目の、黒い瞳がつつや光っていて、笑うと二本の前歯が大きく見える。その頃テレビで放送していた人形劇「トッポ・ジョージ」のネズミのキャラクターにどこか似ていて、まわりから「ちゅーた」というあだ名で呼ばれていた。

学校で「忍者芸帳」という長編の劇画が流行ったのも、その頃だった。父親の仇を討つためにさすらい剣客と、影武者や忍者たちの物語である。単行本全12巻が教室で回され、みんな夢中になって読んでいた。休み時間になっても、誰一人校庭に飛び出さなくなり、授業が始まって、あちこちの席で先生の目を盗んで、こっそり単行本を広げていた。

私とちゅーたも、授業中、机の陰でページをめくった……。陰謀、裏切り、暗殺。「グサツ!」「ザバーツ!」と、

斬り合いが繰り広げられた。

その血なまぐさい劇画の中に、男と女の物語が描かれていた。重太郎という剣客と、忍びの娘、明美の恋である。そこに、敵の「くのいち」蛍火の切ない女心が絡み合う。

私もちゅーたも、夢中でページをめくった。

「重太郎!」

断崖から飛び降り、重太郎に身を投げかける蛍火……。

9歳の私が初めて見た大人の恋だった。なぜか、胸の鼓動がトットツと早くなる。「蛍火、どうしたの?」と、隣を見た。すると、ちゅーたは「きつと、惚れてんだろ」と、言った。

同級生の口から「惚れる」という言葉を、初めて聞いた。ちゅーたの黒い小さな瞳が、ちよっと大人びて見えた……。

私は学校から帰るとランドセルを放り出し、庭に向かって突き出た縁側に腰かけた。なんだか、一つの世界のふちの、ぎりぎりに腰掛けているような気分だった。

「蚊に刺されるわよ」

マツチ棒を擦るシュツという音と共に、燐が燃える硫黄臭がして、母が蚊取り線香を縁側に置いてくれた。深緑色の渦巻き先から白い煙がたなびい

Taste  
of  
the Season vol.13  
text by Noriko Morishita  
illustration by Mizue Hirano

## 黒い瞳とスイカの種

エッセイスト 森下典子

て、鼻腔の奥に、苔のような濃い緑の匂いがツーンとした。

その日、縁側で素足をブラブラさせながらスイカを食べた。水道で冷やしたスイカはシャーベットのようになりシヤリシヤリして、果肉の窪みに、たちまちうす赤い汁が溜まった。その汁をすすりながら、私は心の中で「ホテル来い」の一節を「こっちの水は、あーまいぞ」と口ずさんだ。

口からあふれ出る汁を手の甲で拭きながら、「プツ!プツ!」と、種を出す。その黒くツヤツヤ光るスイカの種は、ちゅーたの瞳にどこか似ていた。

もりした のりこ / 神奈川県生まれ。横浜市在住。日本女子大学文学部国文学科卒。『週刊朝日』の名物コラム「デキゴトロジー」のライターを経て、エッセイストとなる。主な作品に、『日は好日』『猫といっしょにいるだけで』（新潮文庫）、『いといたべもの』（文春文庫）など。近著に『こいいたべもの』（文春文庫）がある。